るれども、回鶻字にては然らず。[51] 要するに回鶻字にては文字相互の間に於る混淆甚しきが、ソグド字にはかゝる不便は存せず、只nとz（ẓ）との間に於てのみ之が存し、其の下に打たるゝ一箇の符點によりて區別せらるゝのみなり、畢竟此等の文字はソグド文字の中に於て其の固有獨立の形を認むべし、而してソグド字は語頭語間語尾に於て常に同一にして、連接によりて膠着すること少し、

と記し、又特に回鶻字の [illegible]（l）字の由來を論じ、

[52] Andreas 氏の所論に明らかなるが如く、基督教經典及び佛教經典に用ゐられたる中世ソグド語には、l音の存せざるに反し、摩尼教經典の同語には、dより發せるl音が存在し、[illegible]（r）字に [illegible] の符號を付したる形、即 [illegible] を以て之を表はしゝが、此の字は中央亞細亞より發見せられたる古代トルコ族の遺文に認めらるゝが如く、初より回鶻にてはl字として用ゐられたるものなり

とし、若し回鶻字がイランの根原にして正しくl音を知らざる方言、即ち基督教若しくは佛教ソグド語等より來れるものとすれば、此の事は説明し得べきに非ず、又回鶻字の根原が直接セミチック文字に溯るものとすれば、其の文字の中には res（補エストランゲロ字にて示せば [illegible]）と共に lāmd（補同上、[illegible]）を有すべき筈なり、然も若し之が摩尼教の方言に溯るものとすれば、根本的にはdの音價を有する文字がlを寫すに用ゐられ得べきなりと説き、更に又回鶻字にては唇音及び喉音に屬する有聲音と無聲音、即ちpとb及びkとgとが同一文字によりて表はさるゝ理由を論じ、此る現象は回鶻文字がソグド文字を甚だ異りたる音韻法に於て襲用したるものなるを知らば、決して怪しむに足らずとなせり。